緊急ワークショップ「『アラブの春』再来？――スーダン、レバノン、そしてイラク」報告書

標記ワークショップが 2019 年１２月１５日（日），明治大学にて横田貴之氏（明治大学）の司会により開催された。

初めに，本ワークショップの企画者である酒井啓子氏（千葉大学）より，開会の挨拶として，スーダンを始め，イラン，イラク，シリア，レバノン等で大規模な反政府抗議運動が相次いでいる現状が，およそ１０年前の「アラブの春」を彷彿とさせるとの問題提起がなされ，本ワークショップではレバノン，イラク，スーダンについて長い研究歴を持ち，現地を知悉する地域研究者と歴史研究者による現状及びその背景，要因の分析がなされると紹介された。

報告パートでは，まず黒木英充氏（東京外国語大学）により，「レバノン、160 年越しの変革なるか―宗派体制・宗派主義の行方，暗転のきざし」と題して，2019 年のレバノンにおける「革命（サウラ）」が全国規模に広がった現状及び背景が報告された。数々のデモの横断幕やグラフィティ（落書き）から，今回のデモが幾度も繰り返されてきた従来のデモとは異なり，立場や宗派の異なる人々が一緒に行動を起こし，既存の政府，エスタブリッシュメントの一斉退場を要求していることに加え，香港やカタルーニャ等の他地域の民衆運動との連帯を目指す傾向も見られると指摘した。さらに，レバノンで 160 年続く宗派体制の問題に加え，アメリカの圧力に端を発して全銀行が閉鎖に追い込まれる危機的な経済・金融状況，難民流入による財政逼迫等の問題が多層的に積み重なり，元来，超格差社会であるレバノン社会にさらに深刻な断層線が生じているとした。

次に，酒井啓子氏により，「国民として立ち上がる――イラク１０月革命と若者」と題して，本年１０月にイラクの首都バグダードのタハリール広場で起きた反政府デモについて，背景及び特徴が報告された。デモ隊には乗っ取られた「祖国（ワタン）」を国民の手に取り戻すという意識があり，今回のデモは国旗を掲げたイラク・ナショナリズムの発露であるとし，その背景にはイラク戦争後の政治体制における亡命派と国内勢力との争いとポスト配分問題があることを指摘した。そして，今回のデモの特徴については，リーダーが不在であることや，人口の過半数を占める若者や女性の参加が顕著となっており，またイラク国民の世代間での政治的社会的経験の相違から，不満の質もまた異なる点を明示した。生活改善，腐敗の根絶，反イラン，反政党，地方選挙の停止及び地方議会の解散等，「すべてを取り換える」要求が掲げられたが，今後の展望は不透明であるとした。

最後に，栗田禎子氏（千葉大学）により，「スーダンの民衆革命――中東・アフリカにおける変革の展望と現代世界にとっての意義」と題して，2018 年１２月に反政府抗議デモが起き，本年４月に３０年にわたるバシール独裁政権を倒したスーダンについて，デモの経緯及び成果とその特徴が報告された。今回の動きを民衆による「革命」と呼ぶにふさわしいと評価し，デモの勃発からバシール失脚，その後の暫定軍事委員会によるデモ参加市民の虐殺，市民的不服従を経て移行期政権が樹立されるまでの経緯が説明された。特徴としては，独立後の民主化闘争やインティファーダという経験の蓄積，将来的な予測を持ち段階的に手を打つ専門職や有識者の存在，軍事政権に対する徹底的な非暴力姿勢が挙げられた。今後の課題としては，イスラーム主義者等の旧体

制の残存勢力と諸外国の干渉，ダルフールをはじめとする国内低開発地域における武装抵抗運動の動向であると指摘した。

後半の討論パートでは，まず岡崎弘樹氏（日本学術振興会特別研究員 PD）により，シリアの現状の説明を交えつつ，レバノン，イラク，スーダンでは社会における自律性がどれほど確保されてきたのか，殺戮をいかに止め得るか，そしてアラブ諸国の状況に我々は共感性を持てるかという論点について問題提起がなされた。

次いで，鷹木恵子氏（桜美林大学）により，「アラブの春」の成功例であるチュニジアの民主化の事例を踏まえて，アラブ諸国の民主化を通観する一つの参照枠組みとして，UNDP『アラブ人間開発報告 2002』で指摘されている、アラブ諸国における自由の不足，女性のエンパワメントの不足，知識の不足の３点の改善が、民主化への参照点にもなり得るのではとの問題提起がなされた。

その後のパネルディスカッションでは，討論者からのコメントとフロアからの質問に報告者が回答した。デモ隊の非暴力志向が改めて指摘された他，特に IS という「かかし」と防波堤論理により,「テロとの戦い」の名のもとに国内の反政府運動が弾圧される構図や「国際社会」の意図に，デモに参加する民衆はもはや気が付いており，簡単には騙されないようになっているという認識が確認された。さらに，民主化における女性の役割の重要性についての認識は世界的な傾向であり，アラブ諸国では特に政治分野での改善が待たれているとの現状説明があった。

本ワークショップは，現地で収集された臨場感あふれる写真やメッセージに基づく現状と，歴史的背景を踏まえた政治社会的分析により多くの聴衆を集め，多様な問題関心を喚起することができ盛会であった。

（文責：千葉大学特任研究員　幸加木文）